

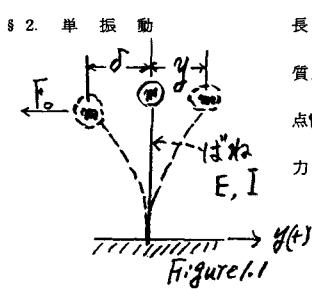
I - 467

三角波形動荷重の Duhamel 積分

ロック建設技術研究所 正会員 今井芳雄

§ 1. 前言、動荷重 (dynamic loading) $F(\tau)$ が三角波形で正負繰返すいわゆるのこぎり歯型である時 $\int_{\tau=0}^{\tau=t} F(\tau) d\tau \cdot \sin \omega(t-\tau)$ は Duhamel

積分になるわけであるが $F(\tau)$ が τ の1次式の時は \sin を展開することによって動的変位を手計算で求めることが出来るということである。



§ 2. 单振動 長さ l 断面2次率 I 弹性係数 E のばねに固定した質量 m (重量 g) の質点 m を力 F_0 で $\delta = F_0 \cdot l^3 (3EI)^{-1}$ で静止させてから F_0 を断つと質点 m はばね力を受けながら右方に運動する。動的変位 y の時、質点は $k \cdot y$ の力を左方に受けて次第に速度をおとす。加速度が左方にはたらくからである。

§ 3. 強制振動、Figure 1.1 の質点 m に時間 τ の1次関数の外力 $F(\tau)$ が τ と共に変化して作用すると $K \cdot (-y) + F(\tau) = m \frac{d^2 y}{dt^2}$ である $\therefore m \frac{d^2 y}{dt^2} + K \cdot y = F(\tau)$ である。この微分方程式の解は $y = y_0 \cos \omega t + v_0 \cdot \omega \sin \omega t$ より進める。ここで $\omega = (K \cdot m^{-1})^{1/2}$, $K = F_0 \{ F_0 \cdot l^3 (3EI)^{-1} \}^{-1} = 3EI \cdot l^{-3}$ ニュートンの運動法則から時間 τ の微分を $d\tau$ として $F(\tau) \cdot d\tau = m \cdot dv \quad \therefore dv = m^{-1} \cdot F(\tau) \cdot d\tau$. $F(\tau)$ が連続して作用すれば時間 t 後の動的変位は、力の独立作用の原理から dy 每の変位の累積したものに等しくなる。時間 t

後の動的変位を $y(t)$ とすると

$$y(t) = y_0 \cdot \cos \omega t + m^{-1} \cdot \omega^{-1} \int_0^t F(\tau) \cdot d\tau \cdot \sin \omega(t-\tau) \quad \dots \dots \dots \quad (2.1)$$

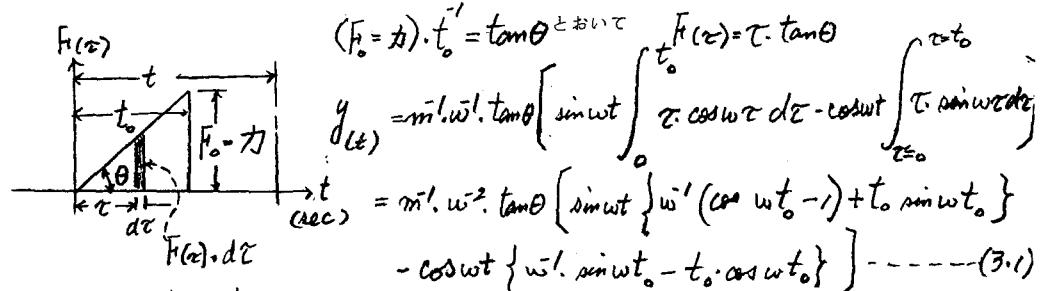
$$= y_0 \cos \omega t + m^{-1} \cdot \omega^{-1} \left[\sin \omega t \int_0^t \{ F(\tau) \cdot \cos \omega \tau \} d\tau - \cos \omega t \int_0^t \{ F(\tau) \cdot \sin \omega \tau \} d\tau \right] \quad (2.2)$$

初期変位 $y_0 = 0$ とする $y(t) = 0 + m^{-1} \cdot \omega^{-1} \int_0^t F(\tau) \cdot \sin \omega(t-\tau) d\tau$
 $= m^{-1} \cdot \omega^{-1} \int_0^t F(\tau) \{ \sin \omega t \cdot \cos \omega \tau - \cos \omega t \cdot \sin \omega \tau \} d\tau$ この式では t に対し常数故積分の外に出でる

$$= m \cdot w^{-1} \left[\sin \omega t + \int_0^t \{ F(\tau) \cdot \cos \omega \tau \} d\tau - \cos \omega t \int_0^t \{ F(\tau) \cdot \sin \omega \tau \} d\tau \right] \dots (2.3)$$

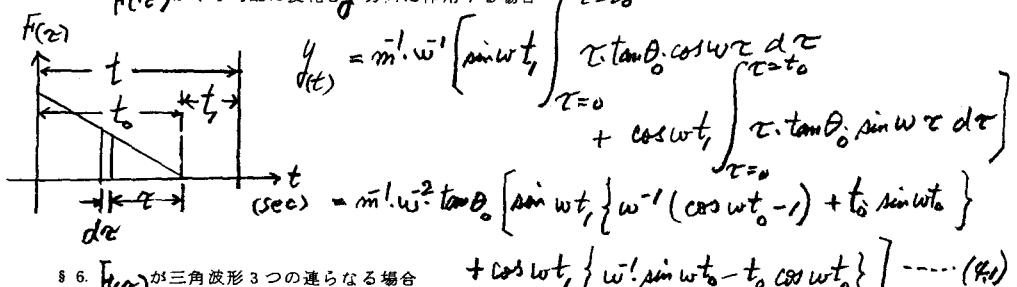
τ の或時刻における $F(\tau)$ の作用効果の time, t にあらわれるものの累積であるから t は任意でよいわけである。

§ 4. $F(\tau)$ が上り勾配(時間 τ と共に増加)に変化し y 方向に作用する場合



(3.1)式は任意の time, t における動的変位 $y(t)$ を求めるものである。

§ 5. $F(\tau)$ が下り勾配に変化し y 方向に作用する場合



§ 6. $F(\tau)$ が三角波形 3つの連なる場合

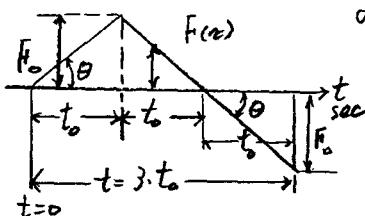
(3.1)式 (4.1)式の代数等として求める。動的変位を $y(t)$

とおいて

$$y(t) = m \cdot w^{-2} \cdot \tan \theta \left[\sin \omega \cdot 3t_0 \left\{ \omega' (\cos \omega t_0 - 1) \right. \right.$$

$$\left. + t_0 \cdot \sin \omega t_0 \right\} + (-\cos \omega \cdot 3t_0 + 2 \cos \omega t_0)$$

$$\left. \times \left\{ \omega' \sin \omega t_0 - t_0 \cos \omega t_0 \right\} \right] \dots (5.1)$$



§ 7. 結言、耐震の立場からみて、最大 gal (cm.sec⁻²) もさることながらその立ち上りまでの time の長短が最大変位 $y_{(t)}$ を大きく左右することである。即ち $F_0 \times t_0' = \tan \theta$ の大小である。最大 gal の前後の秒数 t_0 を 100 分の 1 秒まで知れば足りる。固有振動周期 T を求める事が示方されているから $T \cdot w = 2\pi$ から w が知り得る。